新治小学校だより

ひびく心　はずむ体　見つめる目
～新治のよさを持続して生かしながら、
よりよい社会を創ろうとする子どもを育む学校を目指して～

令和5年度
4月号
令和5年4月7日

なりたい自分

校長　川島　広子

今年は桜の開花が早く、４月には散ってしまうと覚悟していましたが、校長室の窓からはまだ美しい桜をみることができます。風に舞う桜吹雪はとても美しく見惚れてしまうほどです。この様な春本番の中、児童２１４名、教職員３７名での新治小学校の新年度がスタートしました。

さて、３月の修了式で、新２～６年生に「次の学年でどんな自分になりたいか、春休み中に『なりたい自分』を考えてみてください。」という宿題を出しています。『なりたい自分』とはつまり自分自身の半年後、１年後の目標のことです。昨年後期が始まる際にも同様の宿題を出しましたが、「もっと挨拶ができるようになりたい」「友だちに優しくできるようになりたい」など、子どもたちは、「なりたい自分」を思い描き、他者とかかわりをもちながら行動したり努力や工夫をしたりしていました。そして、なりたい自分に近づくための過程を仲間や保護者や教師に認めてもらい、自己有用感を高めることができていました。

よく、自尊感情、自己肯定感、自己有用感という言葉を聞きますが、私はこれまで類似した言葉としてあいまいに捉えてしまっていました。国立教育政策研究所のリーフレットによると、「自尊感情」や「自己肯定感」は、**自分に対して肯定的な評価を抱いている状態**を指し、「自己有用感」は、人の役に立った、人に喜んでもらえた、人に感謝された…等、相手（他者）の存在なしには生まれてこない点で自尊感情等と異なると書いてあります。そして**自分と他者（集団や社会）との関係を自他ともに肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価**である「自己有用感」の育成が社会性を育むためには重要だと言われています。例えば「クラスで一番手先が器用」という自信ではなく「手先が器用なので、入学式準備で１年生が喜ぶように頑張ってきれいに壁面飾りを作った」という自信の方が大事で、「クラスで１番」かどうかはさほど重要ではないということです。

４月初めに教職員と新治小学校で子どもたちに身に付けさせたい３つの資質能力（取組目標）について確認をしたのですが、その中の１つがまさにこの「自他を大切にし、社会とかかわる力」の育成でした。社会性を育てることは「子どもたちが社会で幸せに生きていく力」に繋がります。子どもたちの自己有用感を高め、人とのかかわりが好き、人の役に立ちたいという子どもを学校で育てていきたいと思います。

新学期開始前の４月５日に、新６年生が登校し、入学式や新学期の準備を進めてくれました。新６年生は、自分たちが新治小学校の次のリーダーになるのだという意識がとても高く、下級生のために準備をしたいという頼もしい姿を見せてくれました。６年生が自分のことだけでなく１年生や学校全体のために役に立ちたいと思う気持ちは、まさに学校で目標としていた子どもたちに身に付けさせたい資質能力です。新６年生がこれまでの教育活動の中で確実に社会性を身に付けていることを嬉しく思うと同時に、最後のまとめの１年間でさらにその力を伸ばし、下級生のお手本として立派な姿を示してほしいと思います。

新治小学校は、豊かな自然に恵まれており、地域や保護者の方々が学校を全面的に応援し子どもを育ててくださっている点で非常に恵まれています。新治の子どもたちの幸せに生きる力の育成のために、今年度も皆様のご支援とご協力をお願いいたします。